



この人を たずねて

神戸大学大学院人間発達環境学研究所 教授

森岡正芳氏

インタビュー
福田茉莉



Profile—もりおか まさよし

1982年、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程退学。博士（教育学）。臨床心理士。専門は臨床心理学・文化心理学・カウンセリング。著書は『ナラティブと心理療法』（編著、金剛出版）、『揺れるたましいの深層』（共編、創元社）、『カウンセリングと教育相談』（編著、あいり出版）、『インタビューという実践』（分担執筆、新曜社）など。

■森岡先生へのインタビュー

—現在、取り組まれている研究テーマについて教えてください。

ナラティブ、物語という視点に立って、臨床実践の場を探究していくと、一見異なる理論背景やフィールドを持つさまざまな技法や数多くあるサイコセラピー、つまり心の癒しにかかわる方法論の接点が見つかります。心理学用語で言えば、共通要因。僕はそれに関心があるんです。特に媒体・媒介としての言語、アート、音楽など。アートセラピーでも、描画をすれば人が癒されるとは簡単には言えません。ではなぜアートがセラピーの媒介として有力なのか、結局は、絵が治すのではなく、絵を介して会話する、対話する、そういう場が生まれてくるんです。絵を描くことで自分自身を振り返ったり、あるいはその振り返りを誰かに聞いてもらったり、または言葉にしなくてもそばにいる誰かが共感してくれたり共体験したりと。この共体験の場が生まれることが重要であり、そこには必ず

誰かが存在しないとけません。私と誰かと媒介物、この三項関係なんです。この三項関係がサイコセラピーの基本であることが、だいたい見えてきました。

また、最近の研究のひとつはナラティブの独自性に関するものです。たとえば、広島の実験者の方々がどのように語り、自分の体験をどのように述べ直すのか、その語りを意味のある語りとして他者に伝えようとしているのか、ということです。被爆者の方々のこれまでの研究から、語りは状況によって変化し、社会的な文脈が語る行為そのものを規定していくことがわかりました。今、沖縄戦を体験した方々へのインタビュー調査の共同研究を進めています。これまで沖縄戦には光があたっておらず、体験者もまた、語らないままに消えていくというか、そもそも語ろうともしませんでした。「語る／語らない」の判断が、社会的・政治的な文脈の中で、かなり難しかったんです。ある例では、一人のカウンセラーがある体験者の元を何度も訪問して寄合を

つくり、「語らなくてもかまわないから」と、1,2年かけて小集団に馴染んでいく中で、少しずつ自分の体験を語れるようになったことがありました。こういう場面が必要なんですね。ナラティブは、このような、語れるようになるまでのプロセスを含みます。語られた内容だけでなく、語るに至るまでの場面とか、関わる人たちの動きとか。語られた内容もそれが事実かどうかということ、出来事がどのように体験されたのかという体験の次元とが区別されます。「いつどこで何が起こって、肉親を亡くした」という史実的な時間の流れがありますよね、いわば、ヒストリーや年代記です。厳密に言えば、年代記はナラティブではないんです。ナラティブでは、その出来事を個人がどのように体験したのかが重要です。名前のあるAさんがそれをどのように体験したのかが語りなんです。そこには、ひょっとしたら事実誤認があるかもしれません。出来事の発生順序や、人を間違っていたりするかもしれません。それが間違っているかどうかはさておき、Aさんがどのような体験をしているのか、体験の意味を聞いていくのがナラティブなんです。

—ナラティブ研究の多くは個人に深く関わりますが、研究者にはどんな倫理性が求められますか。

それは大きな課題です。だからこそ、当事者と協働であると言いたいんです。研究者が一方的に聞き出したものを資料として研究するのではなく、当事者である「あなた」も、積極的な研究協力者です。公開を前提に、あなた（協力者）にも研究プロセスにできるだけ参加してもらいます。記録はあなたのものですから、全てコピーして渡し、読んでもらいます。実際に欧米のナラティブグループで



は、サイコセラピーにおいても、このようなアプローチを行うのです。基本的にケース・カンファレンスはクロズドで実施するのですが、欧米では、クライアントが同席しているケースもあります。日本ではまだ適用は難しいのですが、実践での倫理性ということの一つの考え方として参考になります。

——さきほど、当事者の「語る／語らない」に社会的文脈が影響するという話がありましたが、それを見極めるポイントは何ですか。

信頼関係と言ってしまう一言で済みますが、この信頼関係というのも実に曖昧なものです。どこかの大学の先生が、「Aさんのケースを研究発表したい」と言ったら、当然、そこには力関係が発生します。Aさんがノーとは言えない関係もありうる。要は、研究者が自分の言葉にどの程度責任をもてるのかということです。一方で、セラピーであっても、クライアントにも自分の言葉に責任を持つ姿勢が求められるかもしれません。カウンセリングもそうです。「先生におまかせします。好きにやってください」ではなく、カウンセリングは対話です。「あなたは思い出してもよいし、思い出さなくてもよい。感じたことを感じてよい。同時に、感じていないことは感じなくてよい。50分間、ここで話をするということは、あなたにも自分自身に立ち向かってもらうという一つの責任、態度が必要だということ」。そういう姿勢がお互いに求められると思います。

——では、より良い対話とは？

会話の自由度が重要です。自由度は会話の質、つまり創造的な会話、あるいはクリエイティブなものを生み出す会話に関係すると思います。発話量や反応的確かさ

けでなく、発話されたものに加えて、振る舞い、パフォーマンス、適度な間合いは大切な点です。あとリフレクション、本当に熟考されて振り返られながら語られているという語感や語調にも注目します。そこで生じたその人の発話のすべてが資料となるでしょう。質が高いとは、そのようなものが豊かであり、かつ多様に分析可能であるということ。さらに交流性が非常にビビットに浮かび上がっていることでしょう。

——最後に、心理学を志す若手研究者にメッセージを。

やはりまずは師弟関係を大切にすることが重要だと思います。「この先生の心理学が面白い」と感じたのであれば、その先生のをマークし、取り込むのが出発点になるでしょう。その先生の人間味や、何が自分の心を動かすのかが見えてきます。あと、本を読むことも重要です。心理学者だからこそ、本を通して人を見つめる、考えるということを大切にしてほしいですね。心理学者は、文字媒体で議論することを軽視しがちですが、研究の発想やアイデアは、二次資料から得ることも多いんです。心理学の古典もそうです。原典を掘り起こせば、自分の気に入ったものにも出会えると思います。

■インタビューアーの自己紹介

インタビューを終えて

率直な感想を述べさせていただけますと、森岡先生とお話しさせ

ていただいて、大変楽しかったです。もっとお話を聞きたい、もっといろいろなことを教えていただきたいと、最終的に質問攻めにしてしまいました。何事にも丁寧に、そして真摯にご回答くださいました先生に、研究者としても先達としても大変感銘を受けました。

私自身もまた、臨床心理学とは異なる形ではありますが、医療現場をフィールドとして、難病患者や生活困窮者を対象としたインタビュー調査に従事しています。ひとつは、治療法が確立していない進行性の難病患者に対してライフ（生命・生活・人生）の質をどのように支援すればよいのか、というものです。難病患者の日常生活の語りから患者のライフに接近する方法を探究しています。他方は、生活困窮者が抱えるさまざまな困難性に対して医療機関がどのような支援を提供できるのか、医療スタッフとともに具体的な支援策を模索しています。いずれも、ナラティブデータを扱う研究であり、研究協力者との関係性や対話性、現場での文脈性が重要となってきます。

今回は、研究を遂行するうえでの私自身の課題を中心に質問させていただきました。森岡先生のお話は、現場に参入する研究者にとってどれも大変示唆に富んでいたと思います。最後に、森岡先生が私にかけてくださった言葉をここに記しておきます。——『よい聞き手はよい書き手である』。



Profile—ふくだ まり

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員。2011年度日本学術振興会特別研究員（DC2）。2013年、岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程修了。博士（文化科学）。同年より現職。専門は応用社会心理学、健康心理学。著書は『社会と向き合う心理学』（分担執筆、新曜社）など。